

にあうたびに「不安のしこりをとって幼稚園生活を楽しませることが先決。それから後、左利きがいけないのではなくて両手利きにしましょう」と話す。園生活の中では、比較的好きな動きのリズムで、徐々に自信をつけさせたいと考えるが、大切な家庭の父よりも解つに貰いたい母が、とかくいそがしい、いそがしいで話し合いにならず、まことに困っている。A子の幸せへの道がここで甚だ遠くなっているように思われる。

2. 公正な評価を。本年五月、園児の入園前と入園後の日常についての質問紙を、保護者に回答提出して頂いた後で、男児Bの熱心な母親から聞かれた。「調査表の質問の欄ですが入園後、Bの質問の数が少くなりましたが、そのような傾向は皆さんの標準の中でどのようなのでしょうか。」知能テストのように数字で解答を得たいようなBの母。この場合その質問が質的に深くなったものか、または外遊びを覚え友だちと遊ぶ時間が多くなり、その回数が少なくなったのかとも考えられ、調査表の項目を整理して得たパーセントの数字だけで答えられるものかどうか窮してしまつた。この例でなくとも多くの父母の方から、「うちの子どもは標準位なら良いと思うのですが」とばくぜんとした間で園生活の評価を求められる。その答がまたばくぜんとしてしまうとき、経験年数をいわずに浪費してきたように思えてゆきづまってしまう。

子どもはそれぞれに違う。子どもをよく見、知り、広い資料から公正な評価をするということ。評価なしでは保育の向上もないのではないかと思うとき、その考え方や実際を知りたい。

(幼稚園教諭・東京)

自由保育のむずかしさ

島田みつ子

私は、経験一年半で、現在地方の小都市の幼稚園で二十七名の四歳児を受持っている。今日までの教師生活で比較的思うことをさせてもらえた私は、非常に恵まれている。学窓を出たとき、相当の理想を掲げていた。短大二年のときだったか「経済的にも、受持人数にもいろいろ困難のある幼稚園で、自由保育が可能か。」というような問題がだされたことがある。私はそのとき、確信をもって「可能である。」と答え、私なりの方法を論じていた。現代の幼児教育の方向からみても、自由保育でなければ、真に幼児の幸せは与えられない。幼児を抑圧から解放し、本当の要求を認めて、個別的に教育するには、どうしても心理的考慮を充分に施せる自由保育がなされるべきである。

そこまでは、教わつてもきたし、私自身よくわかる。しかし、二十七人を一人で持ち(その人数なら糞沢といわれるかもしれないが)、まるく座れば、身動きのとれないようなところである。室内には、子どもがいつでも欲するときにはできるよう、粘土も備えておきたい、材料棚も、ままごとも、イーゼルも、読書をするところも、動植物の飼育も、また、ぼんやりしている子どものかくれ場所も設備したのである。その上、子どもたちは幼稚園の経済におかまいなく、画用紙も大きいものを喜び、布だ、ペンキだ、針金だと要求

する。それが与えられたときは、素晴らしい傑作もでき、子どもの創作力もぐんと上昇する。しかし、それがいつも許されるはずがない。お金のかからないもので、よい材料とよい設備はあるといっても、やはり考え込むのが現実ではないだろうか。

二十七人は、おのおの勝手なことをして遊びたがる。どうしても庭に出たい、どうしても積木をやめられない、「先生、ぼくの絵のお話きいてね。」といって、なかなか離してくれない。そのうちに、どこかでけんかが始まる。その喧嘩のグループは、特に別の部屋で話合つて、自分たちで解決させたいが、さてその間庭の監督は大丈夫だろうか、とまったく忙しくてやりきれない。みんなが仕事に熱中しているのにボツンととり残された子ども、その子に今声をかけ、気長に誘導するのに良いチャンスだが、製作の助言をせがまれば、それも捨てておけない。そうした中で記録もとりたいたい。

こんなことは、クラスだけで解決するのではなく、園全体が協力すべきだといわれるかもしれないが、私たちはできるかぎり力をあわせている。しかも手が足りないことは、環境設定と受持人数の問題ではなからうか。まったくの自由保育でない、コア型ということも知らないではない。が、何といつても、心理的、個別的に子どもをみていくには、今日の幼稚園のありかたに考慮すべき点があると思われる。とり残されたり、下積みになったりする子がないために、ひとりひとりを大切に扱う理想的な自由保育の方法をさらに深く研究することが必要である。

(幼稚園教諭・長野)

保育日誌をかえりみて

鈴木輝子

四月十日(うすぐもり)

朝からうすら寒い天気。母親に手を引かれた元気な子どもたちでホールはいっぱいになる。

はじめての勤めのためか不安が先にかけておちつかなかったが元氣な子どもの顔を見ているうちに何かしら胸があつくなくなってくるような思いがした。今日からこの子どもたちの良き友となることが出来るようにと祈る。

四月十一日(曇)

「先生おはよう」とカバンを自分のカバンかけに掛けるとすぐにプランコに乗りに行く子ども、

母親にしがみつき離れられない子ども、

「お家に帰るー」と泣きだす子どもでたいへんな騒ぎである。これらの子どもをやっとなだめて室に入れ、ほっとする。どの子どもも緊張した顔で私を見つめている。ひとりひとり名前を呼ぶごとに可愛い声で返事をする。ひとりの子どもだけが返事が出来ずにうつむいていた。

礼拝前お手洗いかせる。皆ばたばたかけだしていき、水道の前で手を洗いはじめた。どうしたのだろうと思っていると、手を洗い終わった子が「先生おしっこしてきてもいい？」と、私ははじめから